

「何もない」現在を見つめること

―文芸時評家としての湯地朝雄―

山口直孝

はじめに

湯地朝雄（一九二五年―二〇一四年）の文業は、まだ正当な評価を得ていない。小説や詩を手がけていないこと、文章の発表がほぼ運動系の媒体に限られること、著作がまとめられたのがマルクス主義の世界的な退潮の局面であったことなどが、理由として挙げられよう。しかし、階級闘争の歴史観に基づき、政治と文学とのあるべき関係を見据え、最も原則論的に思考しえた存在として、彼を無視することはできない。本稿では、大西巨人、武井昭夫の同伴者であり、同時に独自の言論人であった湯地の仕事のうち、時評を取り上げる。折々の状況に対して、どのような発言がなされ、そこからいかなる姿勢がうかがえるかをめぐって、いくつかの例を検討する。小考は、埋もれている断片から、文芸批評家の面目を探り出す試みである。

一、出発点としての時評

湯地朝雄は、一九二五年十一月二十一日、鎌倉に生まれた。祖父湯地定鑑^{さだのり}は、海軍機関学校校長、父湯地孝は、青山学院大学ほかで教授を務めた近代文学研究者である。府立高等学校を経て、東京大学文学部国文学科に入学、在学中に全学連初代委員長となる武井昭夫を知り、交流を通じてマルクス主義を知る。学生運動に関わり、また文芸批評の執筆を始める。在学中から『思潮』（昭森社）、『学生評論』（学生評論社）の編集を手がけた。卒業後、総合雑誌『潮』（葦会）の編集を経て、光村図書出版に入社する。一九五一年に新日本文学会に入会、中野重治編集長の下で『新日本文学』の編集に従事したり、東京支部の書記長を務めたりしながら、数多くの批評を発表する。

一九六七年～一九七〇年、神戸親和女子大学助教授。一九六九年に創設された活動家集団思想運動に参加し、芸術運動部会の中心として活躍、『芸術運動』、『社会評論』、『思想運動』で健筆を奮った（筆名として児玉明をしばしば用いた）。階級的視点と国際連帯との精神を堅持した考察は、同時代の文学芸術運動の問題点の洗い出しからプロレタリア文学運動の再検証へと向かい、さらにブレヒトやローザ・ルクセンブルクの分析へと拡大していった。二〇一四年二月九日逝去。

著書に『芸術運動の条件』（土曜美術社、一九七六年四月一日）、『プロレタリア文学運動——その理想と現実』（晩聲社、一九九一年十一月十五日）、『ナツプ以前のプロレタリア文学運動——『種蒔く人』『文芸戦線』の時代』（小川町企画、一九九七年九月一日）、『戦後文学の出發——野間宏『暗い絵』と大西巨人『精神の氷点』（スペース伽耶、二〇〇二年七月五日）、『政治的芸術——ブレヒト・花田清輝・大西巨人・武井昭夫』（スペース伽耶、二〇〇六年五月十五日）。

管見の限りでは、湯地の最も古い文章は、「〈文学時評〉二つの『青春の記録』と二十代の十字路について」（『文学』第一七卷第二二号、一九四九年十二月十日）である。出発点が時評であったことは、彼の言論の性格を象徴的に示している。湯地は、『きけわだつみのこえ——日本戦没学生の手記』（東大協同組合出版部、一九四九年九月三十日）と『生き残った青年達

の記録』(学生書房、一九四九年九月二十日)の二つを取り上げ、状況に対する主体的な抵抗の意識が現われていることにおいて、前者が優れていると言う¹⁾。両手記集の異なりは、「戦争という人民抑圧の破局的段階が、人民のすべてを盲目にしてしまった時代に人間的生長期の決定的な数年を送らなければならなかった人々と、その前に生長期を(曲りなりにも)文化的に過した人々との差」、書き手の受けた教育の違いに由来する。「敗戦後廿歳台に入った」世代を湯地は「われわれ」と呼び、「その学問的・文化的感覚をたえず清新に磨き上げ、その学問的・文化的能力を不断に蓄え伸し、この世代に残されたファシズムの最後の残り滓を払拭し」なければならぬと主張する。

教養形成を十分になしえず、知識人として行動しえなかつた反省の下に、湯地は、自身の属する世代を対象化し、課題を掲げる。自己を刷新しようとする意志が顕著なところは、時評には珍しい特徴であろう。旧制高校で学んだ湯地は、上の世代が受けた教育を享受することができない、真空状態に置かれていた。敗戦後におけるその自覚が、マルクス主義の主体的な摂取を促していったと推測される。戦前の旧制高校の文化、またプロレタリア文学運動とも隔てられていたことは、湯地が冷静に過去を総括することのできるコミュニニストたらしめる一つの条件であつた。

前述のように、若き日の湯地は、編集者であつた。学生運動や文学運動の機関誌に関わりながら、批評を書き継いでいくことは、複眼的な視座を鍛えた。国家権力や独占資本の反動性を攻撃するだけでなく、運動における弱さや矛盾にも批判の眼が向けられていく。『新日本文学』に初めて発表した「社会主義リアリズムの理解のために——徳永直批判」(第六卷第三号、一九五一年三月一日)は、副題にあるように、同誌に掲載された徳永の文章の誤りを取り上げたものである。事実の素朴な反映を新しい社会主義リアリズムととらえることが文学的にも歴史認識的にも正しくないことを、年長者に対して直言しているところに、公正を目指す批評態度が端的に現われている。

警察予備隊の設置、レッドパージの実施、片面講和条約の締結など、いわゆる「逆コース」の進み行きの中、文学者の中には、反共的な、あるいは傍観者的な言辞を弄する者も多かつた。社会主義体制への移行が必然であるという史観は揺らが

なかったにせよ、情勢の厳しさは、湯地に道のりの容易ならざることを体感させる。「文壇のペシミズム」(『潮』創刊号、一九五二年六月十五日)の頃から、湯地の筆致には、陰翳が伴うようになる。「私は、近頃、人間嫌いとして己を持したいという欲望に、しばしば襲われている」、「一切の斟酌を拒否するところの・傲岸不屈な叛逆の精神——そこへ向つて私は、私の内部に人間観の一つの拠点を築造しつつあるのだ」と述懐する「紙背の事実——あらゆる人間論の前提として」(『新日本文学』第九卷第七号、一九五四年九月一日)にうかがえるのは、虚無的な心情に駆られながら、批評行為を継続させる意志である。今このできごとを近くない未来のために論じる、という時間感覚が、湯地の内部で次第に醸成されていたことがわかる。目先の情勢変化に惑わされず、革命運動の原則に即して冷静な分析を行う異形の時評の骨格は、およそ一九五〇年代半ばには固まっていた。

二、重層的な批判——「晩近文学の魅力喪失と〈日本浪漫派〉の復活」の場合

湯地の時評の一例を「晩近文学の魅力喪失と〈日本浪漫派〉の復活——福田和也『保田與重郎と昭和の御代』その他をめぐって」(『社会評論』第一〇五号、一九九七年一月一日)に取り、対象を論じる方法を確認したい。本批評は、四百字詰原稿用紙で約七〇枚あり、分量でも通常の時評の範囲を越えている。表題にあるように、扱われているのは、文学の低迷と保田與重郎の再評価とである。

文芸ジャーナリズムでも問題視されるようになっていた創作の衰退をめぐって、現実社会とのつながりが希薄になったことに理由を求める意見が現われる。中には、巨大なものとの関わりを自覚せず、倫理観を形成してこなかったことが原因であり、国家と向き合うことが大切であるという主張もある。訴えるのは、石原慎太郎や福田和也など保守派の論客であり、その福田によって、保田與重郎が再評価される。湯地は、保田再評価の機運を背景からていねいに説き起している。

保田與重郎は、アジア太平洋戦争下古典回帰によって現実の超克を目指すことを訴え、マルクス主義退潮後の青年知識人の関心を集めた批評家である。心情主義的な言いに共感する読者は絶えず、敗戦後も再評価の声が周期的に挙がっている。福田和也『保田與重郎と昭和の御代』（新潮社、一九九六年六月十日）も、復権を説く一つであるが、「聖戦」の遂行を讃美する保田を肯定する点において、従来の書と趣を異にしている。

近年では、例えば前田英樹が「彼は、東アジア全体の独立、自尊、共栄ということに大きな希望」、すなわち「欧米列強の侵略からアジア諸国を守り抜く、それは近代物質文明に対して、東洋の道徳と精神とその生活とが一致団結して戦うこと」を唱えていたと述べている³。また、谷崎松男は、評伝において「満州国についての保田の認識は偏向してゐたとして、それなら全体たれがその実体を正確といへるほどに把握できてゐたか⁴」と擁護する。保田がアジア解放の戦争を思い描いていたとは考えられず、誤りを一般化して解消しようとする操作にも感心できないが、福田は従来の論者が言及を避けてきた、戦争讃美の部分を取り上げてみせる。

「どこまでゆくかわからない」という感覚において、保田與重郎はまぎれもなく、支那事変の主導者であり、大東亜戦争の先導者であり、聖戦の権化であった。

それが「聖戦」であるのは、取り敢えず明示されるような個別の神によって、戦いが祝福され、命ぜられていたからではない。

勇敢に殺し、殺されるものとして、「殺戮」し「虐殺」することで、人間としての理知や計画を越えた何ものかが、そこに顕現しているからである。顕現すると信じられ、まの当たりにしたからである。戦闘にいざない、その渦中に現れるものを保田は「神」と呼び、日本人をそこまで連れてきたものを、「精神」と呼んだのである。

重く悲しい人間の命を奪う事を、正義や思想によってでなく、「爽やかさ」によって許すからこそ、それは聖なるものな

のだ。

その点で保田は、聖なるものの実践者であり、行為者であるだけではなく、認識者でもあった。

一九三八年五月から六月にかけての中国旅行での見聞を記した文章、特に「書かれた支那事変であった」と呼ぶ「蒙疆」⁵に依拠して、福田は、保田を既成の観念に当てはまらない時代を描き出した書き手として賞賛する。「世界の百科全書は、すべてこの一年間に於て役立たずとなつたのである。それはすべての知識の役立たずの意味である」⁶、「戦争は誰が何を考へて行つたか私は知らない。たゞ征戦である」⁷（「蒙疆」）という感慨に、福田の紹介は見合っている、とひとまずは言えよう。

保田の戦争理解は、戦闘の相手である中国の兵士への想像力を欠落させている点一つを取っても、受け入れがたい。しかし、狂熱的な筆致に、当時惹かれる読者がいたことは押さえておく必要がある。戦争を合目的性から逸脱した行動としてとらえようとする表現に、言論の自由を与えられていなかった青年たちは、ロマンチズムを感じ取ったのかもしれない。保田は、天皇と日本軍兵士との間に直接的な絆を見出そうとする。

我らの日の詩の場所は、皇軍の兵士の銃剣が歌つてくれた。將軍の漢詩や將校の新体詩より、もつと潑刺原始の表現で、北の大陸の兵士たちが表現してくれた。皇軍の節度使を発せらるゝにあたり、奈良の聖武天皇は、「食す^を国^この遠^{とほ}の朝廷^{みかど}に、汝^{いまし}らしく退去^{まか}りなば平けく^{たひら}く吾は遊ばむ、手抱きて我は御座さむ」と歌はれたのである。まことにわが朝の天皇の御製として畏き極みであるが、我ら末世の国民にとりなつかしい君臣一家の思ひを味はせられる随一のものであると思はれた。⁶

古代に存在した理想的な状況が現代に再現されたことを目撃した感動を、保田は綴っている。『万葉集』の聖武天皇歌を本人が詠んだものと受け止め、理想の君臣関係があったと想像するのは、願望の投影に過ぎない。⁷兵士と天皇とが対面する場面

を想起しながら歌を称揚していることから、「政治」と「文学」との静的な対立がむしろ透視される。総動員体制下で抑圧されていたがゆえに、「文学」は過剰であることで「政治」に対する優位を示さなければならなかった。

福田和也が再評価したのは、保田の倒錯した文芸観であった。消費主義の進行によって商業文壇の市場が解体されていく中で、危うさがあえて強調する形で、文芸の力が訴えられている。現実から遊離していることにおいて、福田の礼賛は、保田の言説と類似する。

保田與重郎は、「国内では、人民全体にたいする抑圧と搾取との強化政策とその権力とにむすびつき、国際的には、ファシスト的な侵略主義、資本と銃剣とによる他国の奪取のための精神的露払いとなつた」(なかの・しげはる)『日本浪漫派』の中心的存在であった。コミュニストの立場からすれば、保田、福田は、敵対する相手になる。にもかかわらず、湯地の時評においてイデオロギー的な裁断は見られず、確證的な論証が積み重ねられていることは、注目すべきであろう。

湯地は、福田の読解が恣意的であることを明示する。荒涼とした空間を近代の限界が象徴的に現われた空間として重視する福田は、保田が「蒙疆」で見たものが同じであると言う。しかし、実際に保田が「荒涼」に言及しているのは、「蒙疆」から北京に向けて南下した時、往路の風景から受けた印象を思い起こす文脈においてであった。感情移入的な祖述のずさんさからしても、福田は保田の代弁者たりえていない。湯地は、また、保田の印象変化のゆえんを前線の兵士に触れたことに求めている。侵略の対象として意識されて初めて中国大陸は、意味ある空間として把握されたのであった。文学者として戦争に向き合おうとした保田が、侵略戦争の論理を感性的になぞっていたにすぎないことを、湯地の分析は露わにする。福田と保田とは切り分けられた上で、現実から遊離した想像力がそれぞれに斥けられている。

福田については、さらに詐術的な論法が指弾される。「なぜ日本人はかくも馬鹿になったか」(『新潮45』第一五巻第一一号、一九九六年十一月一日)では、かつて戦場となった史実を知らずに観光で訪れる人々が日本の戦後処理の不十分さを非難する例を踏まえて、現代人の卑俗な心性が批判されている。湯地は、福田のものの言い方が一部の現象を全体に当てはめる、論理

学で言う不当周延であることを指摘する。「戦争は悪だ」という訴えが「戦争はイヤだ」という表明に比べて偽善的だという非難についても、墨子の非攻論（個人の窃盗や傷害が不義であるなら、国家間で起こる大量の掠奪や殺人も到底義ではありえないという考え）を対置して一蹴する。詭弁を常識によって反駁する湯地の記述は、平明であり、説得的である。

直接には福田和也批判である湯地文は、保田與重郎にも遡って検証を行う。関連して、『保田與重郎と昭和の御代』に曖昧に応接するジャーナリズムにも、疑いの目が向けられる。極端な見解が出現する下地として、文学の魅力喪失が話題になっていたことが視野に収められていることは、先述の通りである。同時代文脈を立体的にとらえようとする姿勢を、論述からは見て取ることができる。特定状況に寄り添いながら、対象となる言説の不明晰さを衝き、関連事項についても同じ手続きを採用する重層的な手法を湯地は採っている。ナシヨナリズムと親和的であることで重なる福田と保田とは、異なる亀裂を抱えていた。あるいは、非論理的であることで同一でないものが結びつくことこそがナシヨナリズムの要件であると言えるかもしれない。

三、ナシヨナリズムの「幻影」との対峙

ナシヨナリズム批判は、湯地の継続的に取り組んだ課題である。「晩近文学の魅力喪失と〈日本浪漫派〉の復活」で取り上げられたのは、民主主義が国家意識を希薄にした元凶であると攻撃し、戦場や兵士を観念的に表象することで読み手を動かそうとする言説であった。二年後に発表された「文芸における戦後ナシヨナリズム——江藤淳『昭和の文人』をめぐる」(『社会評論』第一一七号、一九九九年四月一日)では、アメリカ占領政策によって抑圧された民族意識の回復を訴える主張が吟味されている。直接には『文学界』に連載中であった桶谷秀昭の「昭和精神史・戦後篇」が、そして同質の言説として江藤淳『昭和の文人』(新潮社、一九八九年七月十日)が検討されている。異なる時期になされた発言について、同時に批判を遂行することを、湯地はしばしば行った。

桶谷秀昭、江藤淳の論は、中野重治『五勺の酒』(『展望』第一三号、一九四七年一月一日)の読み替えを一つの焦点としていた。中野の敗戦後最初の小説となる本作は、中学校の校長が日本国憲法や天皇をめぐる日本共産党への疑問を綴った書簡体の体裁を持つ。「だいたい僕は天皇個人に同情を持つているのだ」といった感想を抱く「僕」には、良心的な中産階級の人間的心情がうかがえる。敗戦によって社会が大きく変化したとしても、人の意識は簡単に組み替えられないことを、『五勺の酒』は描いている。「天皇に対して同胞感覚を抱く人物「僕」を造型し、そのことを通じて、日本人民の側にある天皇への「愛着」を無視したり軽視したりするところにはいかなる革命もありえないことを熱心に説こうとした」という湯地の言葉は、作意をよく尽くしている。

桶谷と江藤とにとって、『五勺の酒』は、敗戦後の言論の不自由さを反映した作品である。「僕」は中野重治にほかならず、天皇への親近感の表明が一篇の中心と判定される。『五勺の酒』は当初構想された往復書簡として完成しなかったため、梓組がわかりにくいところはあるが、桶谷と江藤との読み取りは曲解ではない。湯地は、天皇制を批判する同時期中野の文章を対照させながら「僕」の人物像が作者と異なることを考証し、二人が小説の全体像を無視して一部を都合よく利用しているにすぎないことを浮き彫りにする。

保守的な批評家においては、階級対立の現実は無視され、「国家」や「国民」が統一体として思い描かれる。観念的な転倒によって、コミュニストの文学者の仕事は毀損されたのであった。江藤淳に代表され、桶谷秀昭¹¹に引き継がれた発想を、湯地は、「戦後ナショナリズム」と名づけている。

戦後というものを、敗戦によるにせよ、占領下であるにせよ、日本人民にとっては、天皇制ファシズムの重圧と戦争による破壊から解放されて、自由と民主主義への道がともかくにも開かれた世界と見るのではなく、敗戦と連合軍(アメリカ軍)の占領によって、独立国家としての主権を奪われ、国家としての自主性も国民としてのアイデンティティも、戦前の日

本にはあったものをすべて失った亡国の民の世界であるとするもので、一言で言えば、これが戦後ナショナリズムの出発点であり、立脚点であるということになるでしょう。

湯地は、また「戦後ナショナリズム」という新しいナショナリズムが、一九八〇年代に江藤淳によって文壇に定型化、構造化されたと言う。見解を支えているのは、時評家としての長年の観察の蓄積であろう。

ナショナリズムをめぐる湯地の、比較的早い時期の発言として、座談会「現代ナショナリズムとインターナショナリズム―テロリズム批判の視点」(『新日本文学』第一五卷第二二号、一九六〇年十二月一日。湯地朝雄、花田清輝、野間宏、佐々木基一、小林祥一郎、武井昭夫)がある。報告役を務めた湯地は、安保反対闘争に対する論評を点検し、大衆観が二極分化(影響を最も受けにくい層という見方と革命の中核となる層という見方と)していることを挙げている。さらに湯地は、関連して坂本義和「革新ナショナリズム試論」(『中央公論』第七五卷第一号、一九六〇年十月一日)が「国民」的な政治運動を組織することを強調していることに触れ、「いったい、ナショナリズムというが、戦後ずっときて、ナショナリズムというような視点が日本の民主化に役立った、それを一層促進したということは、ほとんどないんじゃないでしょうか」と疑問を呈している。国民文学論にしても、安保反対闘争にしても、論説には愛国心に訴えるものが多かったが、湯地は、ナショナリズムが富裕層の権益維持に資する心性であり、国際連帯を阻害する要因になるとして、否定的である。運動への結集を呼びかけた竹内好「民主か独裁か」(『図書新聞』第五五五号、一九六〇年六月四日)についても、「国内問題を早まって国際化してはならぬ。それは民族を不幸におとし入れることであり、敵に乗ずるスキを与えることである。第二段階までは、いかなる外国の力も借りてはならない。中国の反米デモが、われわれにとって有利だと考えるようなドレイの依頼心では、この困難なたたかに勝てない」のように、「国内問題」として事態をとらえる限界があった。同時代の主潮と比した時、ナショナリズムの危うさが敏感に察知されていることは注目に値しよう。運動内部でもナショナリズムに囚われている者が少なくない中、国際的視点を

保持する湯地の見解は際立っている。ナシヨナリズムへの言及は、それより以前には見受けられない。湯地にとって、ナシヨナリズムは無縁のものであり、しかし、否定克服の対象として言及せざるをえないものであった。

「ナシヨナリズムの幻影」(『新日本文学』第三二巻第一号、一九六七年一月一日)では、二つの潮流が話題となっている。

一つは、小田実「平和の倫理と論理」(『平和をつくる原理』(講談社、一九六六年十一月十九日)所収)における個人原理によってナシヨナリズムを克服しようとする主張であり、もう一つは、林房雄、三島由紀夫『対話・日本人論』(番町書房、一九六六年十月二十五日)における大衆社会の到来に精神的荒廃を認め、対抗策としてナシヨナリズムを掲げる提案である。

正反対の方向を持つ二つの意見は、現状を追認した上でナシヨナリズムを議論している点で似通う。「現代の大衆社会状況そのものの一次的な反映にとどまっているという意味で、かつ、その志向の現実的基盤をいまだ欠いているという意味で」、湯地は、それらを「幻影」と呼ぶ。高度経済成長下で急速に「個人」の意識が高まる中で、集団との結びつきの希薄化を埋めるものとしてナシヨナリズムが再帰してくる。慧眼と呼ぶべきは、「個人」と「国家」とを対置させる考え方が運動に弊害をもたらすことに思考が及んでいるところであろう。労働者から市民へと自己規定が変容する中で、運動が力を失っていく局面が以後続いていくことを思えば、三島や林よりも小田への懸念に比重を置いた論述は、今日でも意義を失わない。

空虚を埋めるためにナシヨナリズムは呼び起こされる。唱える者にとって、あるいは「国家」や「国民」は、かつて揺るぎなくあったものと信じられているかもしれない。しかし、実際にはナシヨナリズムは、時代によって移り変わっていく表象であり、「幻影」である。湯地の時評を通覧していく時、アジア太平洋戦争後にナシヨナリズムが様相を変えながら、くりかえし出現していることが観察できる。同時に、「幻影」に惑わされずに対峙する、一つの持続する精神が存在することにも、読む者は気づかされることになる。

四、作品を「未来形において見る」こと

湯地の時評においては、ほとんどの対象が批判的に言及される。資本主義の社会の現実が、コミュニストの目に否定的な様相を帯びることは、間違いない。しかし、湯地がとらえる事象は、イデオロギーによる裁断以前に欠陥を抱えていることにも留意する必要がある。思想性を希薄にした作品が商品としての交換価値すら維持できなかったり、かつての意見を覆す文学者の発言が相次いだりすることが、時評では問われている。湯地にとって、同時代の文学は、「頽廃」の連続に映った。

例えば、「〈文芸時評〉芥川賞の文学的退廃」(『思想運動』第七九号、一九七五年二月十五日。児玉明名義)では、芥川賞が「今日もなおブルジョワ・ジャーナリズムにおける有力な商策の一つにはかならないこと」を認めつつ、受賞作の日野啓三『あの夕陽』が「作中の「私」の現在と作者の現在とを不用意に混同し」た非自律的な作品でしかないことを説く。¹²「〈時評——文学〈政治と文学〉論の頽廃」(『社会評論』第一号、一九七五年十月一日号)では、埴谷雄高『死霊』第五章「夢魔の世界」の反響が取り上げられ、非現実的な作品世界に「政治と文学」の主題を読み取る世評から、「戦後文学」の後退が判定されている。

小田切秀雄を例に文学者の変節が論じられているのは、「時流に流されているのはだれか——文学・思想の頽廃状況について」(『新日本文学』第五四卷第八号、一九九九年九月一日)である。国旗および国家に関する法律、周辺事態法などが国会で可決される中、文学者が反対の声を挙げない状況を、小田切は嘆いていた。しかし、湯地は、小田切に見られるような態度変更こそが文学者の弱体化をもたらしたと記す。井上ひさし『東京セヴンローズ』や柳美里『ゴールドラッシュ』などの通俗作品に可能性を認める発言や佐多稲子における「文学者の戦争責任」を不問にする評価¹³からしても、小田切の立ち位置がかつてと異なっていることは明白である。

アジア太平洋戦争が終わり、しばらくして後に、湯地は言論活動を開始した。民主主義文学運動は、弱点を克服して十分な発展を遂げることができず、大衆消費社会の波に浸食され、衰退していった。商業文壇もかつての地位を失い、他の媒体に市場を奪われて縮小を余儀なくされている。湯地が同時代に目撃できたのは、「頹廢」の現象だけであった。一見不毛でしかない営為を湯地は、半世紀以上続けてきたことになる。時評を書くことが「徒勞のような格闘」(大西巨人『神聖喜劇』¹⁴)であることは、早い段階で自覚されたことであつた。

一九六一年に『新日本文学』の文芸時評を担当した湯地は、最終回を「これで三カ月、〈文芸時評〉なるものを続けてきて、私はもういい加減うんざりしてしまつた」と書き出している(「批評家の現代文学像」『新日本文学』第一六卷第一二号、一九六一年十二月一日)。自身の心に響かない小説を読むことに消耗し、批評が有効に機能することが期待できないとすれば、意欲は鈍らざるをえない。それでも湯地は作業を放棄せず、次のように自己の姿勢を語る。

このようにして・〈純文学〉の慢性的不振、中間小説のますます繁昌――現代文学の荒廢――批評不能の状態ということが一般的事実とすれば、そこに、小説月旦式の文芸時評などは無意味なものに思われてくるのは当然だろう。けれども、それをあえて行なうとするなら、批評は、作品を現存の完成品としてみず、それを現在進行形または未来形において見るほかはないであろう。何がそこにあるか、ではなくて、何がこれから起りうるか、を見ていくほかはないであろう。何がすでにあるか、と問われれば、批評は、何もないと答えるよりないのだ。しかし、何が可能か、という問いに対しては、批評は、その観点からする現存作品の分析・評価をもって答えることができるはずである。そして、批評家は、そのような現在進行形もしくは未来形における作品の分析・評価を通じて、自己の抱懷する現代文学の理想像を次第に明らかにしていくのである。

「何もない」現在を承認しつつ、「作品を未来形において見る」ことは、過去に「幻影」を求めたことの対極に立つ志向である。まだ存在しない作品の出現を信じて、現在の虚無に耐えることが湯地にとつての文芸時評であった。コミュニストにとつて、未来への投機は、あるいは当為であるかもしれない。とはいえ、個人の生を超えるかもしれない時間を引き受けることは、ただならぬ覚悟を必要とする。持久戦の記録である時評は、著作と並んで湯地朝雄の核心に位置づけられる仕事であった。紙誌に発表されたまま、眠った状態にある不屈の精神を掘り起こし、「現代文学の理想像を次第に明らかにしていく」作業は、有志の読者の課題である。

- 1 注 「『きけわだつみのこえ』の意義と「私達」の課題とについて、湯地は、「『きけわだつみのこえ』と日本の現実について」(東大協同組合出版部編『わだつみのこえに應える——日本の良心』(東大協同組合出版部、一九五〇年七月一日)所収)で再説している。
- 2 徳永直「われわれは数十歩前進しよう——「自転車泥棒」と「肴売の女」とからあたらしく社会主義リアリズムについて考える」(『新日本文学』第五卷第九号、一九五〇年十二月一日)
- 3 前田英樹「保田與重郎を知る」(新学社、二〇一〇年十一月二十六日)「第一章 生涯／戦争の時代へ」
- 4 谷崎昭男『ミネルヴァ日本評伝選 保田與重郎——吾が民族ノ永遠ノ信ズル故ニ』(ミネルヴァ書房、二〇一七年十二月十日)一三二ページ
- 5 保田與重郎「蒙疆」(『新日本』一九三八年九月号、十一月号「未見」、のち、「蒙疆」(生活社、一九三八年十二月五日「未見」)に収録。引用は、『保田與重郎全集 第十六卷』(講談社、一九八七年二月十五日)に拠る。
- 6 保田與重郎「北京」(『いのち』一九三八年十一月号「未見」、のち、「蒙疆」(注五前掲保田書)に収録。引用は、『保田與重郎全集 第十六卷』(注五前掲)に拠る。
- 7 保田が言及する『万葉集』巻六、九七三番歌について、例えば、小島憲之ほか校注・訳『日本古典文学全集 万葉集 二』(小学館、一九九五年四月十日)は、「我はいまさむ」の自敬表現について、「神や天皇などの尊者が自ら語るとい形式をとっているが、実際には代弁者としての語り手(朗読者や中務省の内記などの詔勅原案作成者)が、それらの尊者に対して敬意を払っている特別の敬語表現法と解される」と説明する。
- 8 なかの・しげはる「第二『文学界』『日本浪漫派』などについて」(『近代日本文学講座 第四卷 近代日本文学の思潮と流派 下』(河出書房、一九五二年三月八日)所収)
- 9 「一人を殺さば之を不義と謂ひ、必ず一死罪有り。若し此の説を以て往かば、十人を殺さば不義を十重し、必ず十死罪有り。百人を殺さば不義を百重し、必ず百死罪有り。此の當きは、天下の君子皆知りて之を非とし、之を不義と謂ふ。今大いに不義を為して国を攻むるに至りては、則ち非とするを知らず、従ひて之を誉め、之を義と謂ふ。情に其の不義を知らざるなり」(『墨子』卷之五 非攻上第十七。読み下し文は、山田琢『新釈漢文大系 第五〇卷 墨子 上』(明治書院、一九七六年十二月十日再版)に拠り、ルビは適宜省いた)
- 10 ジョージ・オーウェルは、「ナショナリズムとは自己欺瞞を伴った権力欲といえる」と規定する(「ナショナリズム覚え書き」(川端康雄編『水晶の精神 オールウェル評論集2』(平凡社ライブラリー、一九九五年六月十五日)所収)。オーウェルのナショナリズム理解は、対象を広く取り過ぎる難点があるが、参照するに足る。
- 11 江藤淳の影響によって、第一次「政治と文学」論争に対する桶谷秀昭の評価が『中野重治 自責の文学』(文芸春秋、一九八一年十月三十日)から『昭和精神的戦後篇』(文芸春秋、二〇〇〇年六月三十日)で大きく変化したことが、湯地によって指摘されている。
- 12 語り手の「私」と作者の「私」との混同を分析的に考察する湯地は、「方法化された語り手の機能——「暗い絵」と「わが塔はそこに立つ」との関係について」(『新日本文学』第一八巻第一号、一九六三年十一月一日)が示すように、一九六〇年代前半にすでに語り手論を展開する論者であった。
- 13 同湯地文では、佐多稲子の戦争責任を不問にする言説として、小田切秀雄の他に、久保田正文および佐多稲子本人が取り上げられている。「文学者の戦争責任」を詳細に論じた考察に「文学者の戦争責任——その今日的意味」(『社会評論』第一五〇号、二〇〇七年七月十日)がある。
- 14 大西巨入『神聖喜劇 第一巻』(光文社文庫、二〇〇二年七月二十日)三五九ページ。当該箇所が発表されたのは、『新日本文学』第一六巻第一号、一九六一年十一月一日、湯地が時評を連載中の時であった。

※本稿は、H O W S (本郷文化フォーラム・ワーカースクール) 講座「湯地朝雄の文芸批評——芸術運動と国際連帯」(二〇一九年七月十七日)での報告に基づく。当日は、参加者から、有益なご意見をいただいた。記して感謝申し上げる。

